

## 転換期にある社会は教育に何を要求しているのか

### 教育革命への提言 - その2 - より

財団法人 能力開発工学センター 所長 矢口 新

#### 1 社会が方向転換を迫られていることは教育にとって何を意味するか

教育の革新などということはもうかなり長い間にわたって叫ばれている。しかしその中味に関しては必ずしも一義的なものがあるとは言えない。ある人は教育の管理運営に関して言い、或る人は教育の内容といわれるものについて言う。また教育のシステム化などという時には、学習の方式、授業の場での教材教具の導入についてのことが問題になっている。

このように、さまざまな側面から教育の革新を遂げる必要があることが言われていることは、意味があることである。それだけ現代の教育が全面にわたって検討を必要とする状態にあることのあらわれであろう。確かに現代の教育は非常に根本的問題を抱えている。しかし多くの人はその事にまだ気づいていない。そして、「群盲象をなでる」のたとえの通りに、いろいろな側面から問題にしているのが問題の多様性の原因である。

現代教育の問題は、日本の近代教育百年の歴史の中で何度も起った改革問題と全く異質な方向転換の問題として考えられなければならぬ。多くの人が気付かぬ所以もそこにあるのである。教育は社会の動向と深い関係にあることは誰も知っている。従来も社会の状態の変化によって教育はさまざまな変身をさせられて来た。しかしその場合の社会の側の状態の変化は方向転換というような質的な変化ではなかった。いわば同一方向への発展途上の量的な変化とあってよい。本質的な変化ではなかったとあってよからう。たとえば学校の数をふやすということは社会の変化が多くの学校卒業者を要求するといった量的な変化と考えてよいであろう。これまでの教育の変化はそういう種類の量の増大の要請にこたえる変化であって、教育そのものが質的にかわらなければならぬというものではなかったのである。いつの場合の変化も、それまでの方向と同じ努力をより拡大すればより発展するであろうという絶大な信念をもって行って来た。

しかし今はそうではなくなりつつある。それは教育の変化を要請する社会自体が、今後も従来の努力をつみあげていて果してそれでよいのかという問題に当面しているからである。こういえば現在誰もすぐ気が付くことが一つや二つはあるであろうが、それを端的に示すものは、たとえば先頃発表されたローマクラブの報告書が示す人類の危機に関する提言である。この書は、『成長の限界』という書名で日本でも翻訳され、発行されているが、そこで取扱われている問題は人口の爆発的増加現象、環境の汚染の問題、資源の枯渇の問題など現在人類が当面している危機的問題であって、いずれも過去数世紀にわたって人類が信じて来た永遠の発展の信念を根底からくつがえすような問題である。今までのような考え方で今までのような生活の仕方をしていて、人類はこのまま生存しつづけられるだろうかという根本的な疑問に当面せざるを得ないような事態である。

前の国連の事務総長ウ・タント氏は、だからこの書に序言をよせて、10年以内にこれらの問題を解決する方向に全世界の人々、政府が協力行動を起さなければ、手おくれになって人類は破滅の道を歩くことになるのではないかという趣旨のことを述べている。

こういう問題の地域的現象は日本列島では特に顕著に見え出した。産業による環境汚染は日本列島の周

辺至る所で予想外に深く進んでおり、毎日の食料についても不安なしでは食べられないような事態になっている。

これらのことは、人間の行動の仕方に何らかの変化が来なければならぬことを暗示させるものがある。そしてそうだとするとこれは教育に対しても全面的な変革を要請することになる。今までの教育によってつくられた人間の行動から人類が危機に瀕するということになる、その人間のつくり方をかえなければならなくなることは当然であろう。たとえば生産第一主義の社会が生み出した教育はいたる所にそのニュアンスをもっている。現代の人間はそういうものの総合的産物である。だからそういうものが全面的に変更を要請されることになるかも知れない。そういう点についてわれわれはもっと真剣な検討をしなければならないのではないか。

## 2 人間像が転換しなければ社会の転換は果たせない

『成長の限界』で人口の爆発に対する何等かの処置を求めているけれども、その処置とは一体どういうことになるのであろうか。子供を生むものに対して罰金を課するなどという愚かなことでは意味がないことは誰にもわらう。妊娠中絶を奨励することが人間にどんな悪影響をもたらすかを誰も予測できる。ということはこういう問題は人間性の最も深い部分において処理されなければならぬ問題であるということであろう。一人一人の人間の主体的な自由意志による行動によってこの事がなされるような人間像が作り出されなくてはならないのである。それは一体どういう人間像であり、どういう教育によってつくられるのか。

日本列島という環境は至る所汚染されているといわれる。それは産業公害とも言われ、主として産業がその源泉だということになっている。そのことは現象的には誤りではないけれども、それは必ずしもそういう位置づけ方ですべて問題が明らかになって、対処の仕方がはっきりしたことはないであろう。

そのことはいましばらくおき、もっと卑近な例で考えてみよう。レジャーが増加したので多くの人々が、自然を求めて至る所の高山に出かけ出した。ところがその結果は自然の破壊がどんどん進んでいるという。多くの人が自動車を駆って山の頂上まで登って行く。そのことが植物を死滅させる原因だといわれている。山の上には登山客の捨てたごみの山ができて、これがまた山の生物のあり方に大きな影響を与えているといわれる。

人々が自然の中へ入ることはよいことであろうが、人間が自然の中へ入ることが自然の破壊につながるところが問題なのである。ということは破壊にならぬ行動の仕方自然に入ることを人間が学ばねばならぬということになる。マイカーで山へ入ることは許さぬことだとすれば、その他の方法で自然に入ることを学ばねばならぬ。歩いて行くより仕方がないのなら歩くことができなければ山へは登れないということになるのである。山へ登ってゴミの後始末をすることのできない人間は山へは登れないのであって、そのことはただ良識に期待しているという現在のようないかなるあり方では駄目であろう。良識に期待するといっても良識が子供の頃からつくられていないのである。良識というより行動力であろう。これこれの行動は絶対にできるし、していけないことはしない、といった行動力である。そういうしつけは現代では殆んど忘れられているが、そういうものがもっと教育の全面に出て来て、全体構造がかわらなくてはならぬということになるのではないか。

このように考えると、産業がたれ流しの公害を生み出しているということと、個々人のたれ流しとは本質的におなじこと柄である。産業という言葉がわれわれに何か人間でない特殊なものという印象を与える

が、実は人々の集団にすぎない。人間の一人一人が上にあげたようなたれ流しに不感症であれば、企業という産業集団がそうであるのは当然であろう。とすると環境汚染が産業のたれ流しに原因があるという言い方では問題の本質をついていない。法律をもって産業の公害を規制するようなことをすれば片づくというような考え方ではこのことを処理することはできまい。法律をもって登山を規制するというようなことは不可能であろうが、事態はそれをしなければならなくなっている。企業活動に対しても同様なことが言えよう。

しかし法律による規制が成功するか否かも実は結局は人間の行動が信頼できるかにかかって来るのである。人間自身がたれ流しに不感症であれば、次から次へと人間はたれ流しをするであろう。心の底からたれ流しをするであろう。心の底からたれ流しを拒否する人間にすべてがならなければ法律がほごになるのである。現代は法律の網の目から逃れることを考える人間が成功する社会なのである。そういう浅はかさが公害を生み出し、人類の危機を生み出したのである。法律にはふれなかったが、人類は死滅したということになりかねないのである。やはり人間自体の考え方、否行動の仕方に大きな転換が来なくてはならないであろう。

### 3 近代教育の功罪を検討して教育の路線の転換を考える必要がある

ちょっと考えてもこのように現代の社会状況は人間のあり方、考え方否行動の仕方全般にわたって検討をしなければならぬのではないかと暗示するものがあるのである。

このことはとりも直さず教育というもののあり方に対する検討ではないか。しかしそれは単に教育の技術の問題であったり、制度の問題であったりするのではない。もっと巾の広い、或は奥深い問題で教育の目標から内容、方法、その制度にいたるまでの根本的性格の検討を必要とする問題であると思われる。

我が国の近代教育は明治以来百年間一貫して顕著な性格をもちつづけている。それは教育は立身出世のために受けるもの、授けるものという位置づけ方である。今はやりの言葉でいえば教育は投資なのである。有名な明治5年の学制被仰出書にもその旨ははっきり出ている。これまた有名な福沢諭吉の『学問のすすめ』にもくりかえし述べられていることは、学問は自分が富貴になって行くためにするものだということである。これは日本が百年前産業による国家建設にのり出してからの必然的な方向であった。社会が国民の一人一人に要求することは、すべてが産業人として利を追求して、その目的に全力をつくすことである。あらゆるものが、利を追うことに集中される。人間の行動もすべてがその目的に統合される必要がある。時代の動きというものは面白いことに、必ずしも意識的に自覚しているわけではないが、全体として一般的な人間の行動の仕方をつくりあげて行くのである。意図的計画的な教育をつくりあげるときもそれは働く。こうして教育が一つの方向をむき時代的な性格をもって来る。

明治以来百年間の教育が一貫してねらっていたことは理知的な人間の教育である。知識教育といわれる類型の教育がそこから生れたが、それはまた時代の産物であったと言えよう。長い封建の世の中から新たに開国をしてヨーロッパ、アメリカの先進諸国の資本主義といわれる社会の建設状況を見て、そこに当時の日本になかった科学と技術を見た。そして富貴の実態を見た。そこから知識を獲得し富貴を得ることが教育の目標となったのは当然であった。長い抑圧の時代から抜け出して、人間を解放し、誰もが人間の欲望（それは動物的、非人間的なものも含んでいる）を充足する活動をはじめるように教育された。誰もが利を求め、利を追求して計算することのできる人間とならなくてはならない。利を追求するには知恵を必要とする。それは近代的な知識である。そこに教育が役割を果す。すべての人間は、教育をもとでとして

富貴を求めることができる。教育によって知恵を得て、立身出世をすることは、日本の人々の最大の希望となった。

もちろん長い封建の時代に培われた階級的身分的人間観を一朝一夕に打破はできなかったが、近代国家発足以来一世紀を経た今は、そういうものを払拭したとってよいであろう。一世紀といえば長い時間のものであるが、人間や社会の歴史からみれば、急速な変身とってよいであろう。

それが現在の我が国の高度産業社会を成立させる根源的なエネルギーとなっていることは間違いのない所である。すべての人間が、一様に利益に向って働いているということが、現在の日本株式会社を成立せしめている最大の原因である。エコノミックアニマルの名称も故なしとしない。

人間が利を求めて働く。具体的には金を求めて働くということが、何の抵抗もなくすべての人々に受けとられるが故に、現代社会の制度は成り立っている。巨大な企業が成立するのもそれ以外の何物でもない。それあるが故に産業は高度成長をとげて行く。その裏側にはすべての人間の欲望の充足がどんどんエスカレートし拡大してゆくということがある。物質的なものに対する追求はますます増大する。それは豊かな社会の実現として全く喜ぶべきことであると人々は謳歌している。

こうして現代の教育は現在の豊かな社会を建設するに最も大きな根源的力となっていると思われる。多くの人々はそのことに気付かないけれども、現代社会をつくっている最も大きな力となっているのはやはり、現代人的行動の仕方である。すべての政治的、経済的動向もその人間の行動の仕方の上に成立しているのである。

#### 4 脱近代教育の方向で教育の転換を考える必要がある

教育が今変革を遂げねばならぬとしたら、まさにこの故にこそ変革を必要とされるのである。産業は一切をあげて利を追求することを改めることを要求されている。いまはまだ過去の惰性の中にあるので急に变身できないであろうし、人々の意識も急激に変化し得ない。しかし遠からずもっと大きな変化が来なければ、その存立が危機にさらされることになる。

資源の枯渇に対処するにしても、公害を防ぐにしても、それは現代の人々の利をあくまで追求するという従来の行動の仕方とは相容れないものがある。それは表面的には両立するかの如くに見える。利を追求することを一歩ゆずれば、成立つかの如くである。しかしそれは妥協が成立つ間のことである。一度その妥協が成立しなくなったら根本的に産業のあり方をかえなくてはならなくなるかもしれない。たとえば、資源の枯渇が多くの企業の存立を許さなくなったとき、どうするのか。利益を追求する原則を改めることが必要となるであろう。それにかわってたとえば社会連帯の上に立つ行動が必要となる。それは公害の問題についても同様である。環境汚染が人類の存在にとって危機をもたらすものならば、産業は利益を追求することをやめてもそれを克服しなくてはならぬ。それで産業が存立し得なくなればその時はその産業は崩壊するより仕方がない。その産業が崩壊することがまた別の面で人類に危機をもたらすということになれば、環境を汚染しない形で存立せしめることを考えなくてはならぬ。そういう存立の仕方は、産業のあり方を根本的にかえることになるであろう。利益を追究する産業とはかわって来る。

そういう産業を考えることは現代の人間にとって不得意である。否考えられないことかもしれない。それこそが現代人の欠陥かもしれない。それが現在人類の危機を暗示するような事態を引きおこしているのではないか。過去百年間に教育がつくって来た人間は、努力をして利を生むことに敏感な人間である。

現代教育が利を求めて行動する人間を形成するからくりは意外に根深いものがある。受験教育体制など

といわれる現代教育はその象徴である。これは決して単に制度にのみ原因があるのではない。教育を受ける者の目的は、その教育によっておのれ自身の成長をめざしているのではないというのがこの受験教育の体制である。本来は教育によっておのれの成長をみだすのが目的であったが、今はもうすっかりそうではなくなってしまった。教育を受ける目的はテストに通過することなのである。そのために大変な努力をする。それは学校を卒業して上級学校に入学し、職業につきエスカレーターにのるためである。自己が人生において何をなし、何をなしとげるかということが問題になっているのではない。それはエスカレーターがつれて行く。とにかくテストを受けてよい成績をあげればそれでよいのである。そういう利を追求するためにあらゆる努力をするのである。

奇妙なことだが、人間の成長をみだすなどということは、どこかへ吹きとんでしまっている。それは教育の生命が失われたということになるのであろう。どうしてそういうことになるかということはむづかしい問題であるが、結局は富貴となるという物質的とも言える目標に目がむきすぎて、社会的にも個人的にもそれへの努力が最大の関心事となる。それが次第に教育＝人間形成の道を偏向せしめることになる。何が人間にとって大切なことを考える前に、何が当面自分の利となるかを考えて行動する。そのことはいけなさと知りつつも、社会全体のムードは利を求めて行動することを是とするムードなのである。法律にふれない限りは人間は利を求めてよいということになれば、そこであくどい智慧を働かす人間も育って来るというものである。

教科書の中におのれ自身をみがくということの人生的説教がないわけではないが、それは単なる言葉やお題目にすぎない。社会や教育全体のムードが、そうはなっていないのである。ムードはむしろ利にめざとく行動することによって功をなしとげることができるムードである。こうして学校の内外の生活全体が強い力で人間を形成している。テストは決して自分の人間としての成長のテストを受けることではない。ただ通過する技術として答えられればよいものにすぎない。こうして人間の形成は教育の現実の場から消え去ってしまう。教育は一つの形式となってしまったのである。教育に生命をいれ魂をよみがえらせることは最も基本的な課題である。

## 5 豊かな社会が貧困な人間を作ったことを改めて考え直す必要がある

高度産業社会はいわゆる豊かな社会をつくり出しつつあるかの如くに見える。それと共に人心の荒廃もまたとみに進んで、いたるところに社会的連帯のたがのゆるみが見え出している。これもまた百年間の教育がつくり出した人間の問題ではないか。産業が高度成長をとげた根底には、そのシステムや技術の各分野に人間の能力が十二分に動員されているという条件がある。産業が高度成長をめざして人間を無視したシステムをつくり人間を機械の如くに取扱うのも現代の人間の知恵の一種である。流れ作業の如きものが大量生産の体制を確立してめざましく成長をとげたが、その中で働く人々がすぐれた能力を発揮し得るのも現代人の性格である。それらは根底に人間が利を追求して能力を発揮する性格を形成した現代教育の力が大いにあずかっていると見てよいであろう。

しかしそのことは同時に利のない所では人々は能力を発揮する行動をおこさぬという性格をつくっていると見える。人間が行動するとき、結果をみだして行動する。結果があらかじめ姿をあらわす。つまり行動の目標である。その目標が何であるかによって人間の性格もきまる。現代の人間は、その目標が利益につながっている。富貴につながっている。それが当然であって、それ以外に行動することはおかしいとさえ思う人間である。こうして社会の人々全体のムードは物質的豊かさを実現して来たのである。

しかし同時にそこに人心の荒廃のきざしも見えて来ている。それは必然の結果かもしれない。現代若い人々の間には仕事に生甲斐を感じる人が少なくなっているといわれる。或はまた余暇に生甲斐を感じる若者が多くなっているといわれる。労働は苦役であって、余暇は自分の生活であると考える人も多くなっているといわれる。豊かな社会が生んだ貧困さということかもしれない。ここには人心の荒廃の原因が見られはしないか。

しかし、仕事に生甲斐を感じる程仕事そのものが人間にとって意味のあるものであろうか。生産性をあげるための仕事の組織というのが人間を非人間的なあり方におとしめているところで、そこに人間としての全力を注ぐことができるであろうか。そこに仕事に対する無責任さもなげやりの態度も生れるであろう。仕事への情熱は金で買うことは次第にできなくなって来つつある。それはある意味で豊かさの結果かもしれない。豊かになって来たことが、人間に情熱を失わしめたかの如くに見える。

最近余暇を求める声がしきりである。苦役から解放される時間が望まれているということかもしれない。金よりも余暇という声も高くなって来つつある。しかし余暇が多くなって来つつあるときの余暇は余暇のすくないときのらくらとしていた余暇の過ごし方ではない過ごし方をもたなくてはなるまい。その時に「何を」するのか。そこに人間的な生甲斐を感じることというのは何であろうか。それは人間が「何かのこと」をすることであって、ただのらくらと遊びほうけていることではあるまい。一体そういう生活の仕方を現代の人間は心得ているのであろうか。

充実した余暇の時間というのがあるためには、人間は、またおのれ自身をきたえて「何か」ができる人間になっていなければならない。それは利益を追求することなく、「何か」自体を追求する人間であろう。その人間はもうこれまでつくられた人間とはタイプのちがう人間なのではないか。

このように考察すると、余暇問題は新たな人間像の探求の一つになるかもしれない。しかし余暇が若し人間の生甲斐となったとき、労働がそうでない苦役として存在することが許されるであろうか。労働の時間は非人間的であってよいという事が承認されるであろうか。恐らくそれもまた根本的に改変を要求されることになる。

それはつまり人間が生きること、働くこと、生甲斐を感じることに、これまでとはちがった思想体系で形成されなくてはならぬことになるのではないか。

このことは、教育の目標や、内容や方法すべてにわたって新たな体質の教育が生まれなくてはならぬことを示唆するのである。

過去の教育はもはや成長の限界に達したといってよいのではないか。新たな教育が求められなければならない。新たな教育とは何か。まず第一に何のために人は学ぶのかについて今までと異なった考え方や態度を身につけさせる教育でなくてはなるまい。人間は自己の人間としての成長のために学ぶのであって、学ぶことによって利をうるためではない。自己の成長とは何であろうか。それは立身とか出世とか富貴とかという人間以外の尺度によってはかるものではない。受験にパスするということが尺度になるのではあるまい。

こうなると人間存在の根本にもどって人間の成長というものを考える必要がある。かつて武家社会の武家は己れの天職を人倫の実践において、そのことに一切の修練の目標をおいた。その教育形態は百年前に崩壊したけれども、その教育の体質は現代とは全く異なった体裁のものであった。いまそれが復活するのでなく、新たに次代の教育を考えると、そういう異った体質の教育が存在するという確信をもつことは必要であろう。われわれは現代の教育におぼれている。それから脱出できないでいる。脱近代教育を考える必要がある。その道をさぐることが教育の革新であろう。